

野草観察

仲間の花 勢揃い—12

前回に続いてキク科の花 16 種 (No.181~196) を紹介します。

セイタカアワダチソウ



181

オオアワダチソウ



182

いずれもアキノキリンソウ属で、河川敷や空き地などで見かけますが、セイタカアワダチソウについては群生している姿をよく見かけます。

No.181 は、荒川右岸(葛西橋上流側)で 200m ほどにわたって群生していました(2019.10.23 撮影)。

アキノノゲシ



183

トゲチシャ



184

いずれもアキノノゲシ属で、サラダでお馴染みのレタスもこの属です。トゲチシャは葉裏面の葉脈には刺があり、名前はトゲのあるチシャという意味です。

「チシャって何?」と思われるかも知れませんが、レタスのことです。

草姿からは想像できませんが、新牧野日本植物圖鑑には「トゲチシャの栽培品がレタスである」と記載されています。道端に咲く野草と食卓を彩る野菜との縁…、植物の世界に奥深さを感じられます。

オオオナモミ



イガオナモミ



双方ともにオナモミ属で、前回紹介のブタクサ・オオブタクサ同様に雌雄異花です。上部に雄頭花、下部に雌頭花がついています。いずれの写真も左側が雄頭花、右側が雌頭花です。※花などが密集して固まりになるものを頭花と呼んでいます。

オナモミ属の花は変わったつくりをしています。オオオナモミについて細部を紹介します。



雄頭花：

筒状になった雄しべが多数球状に集まっています。雄花としての役割を終えると落下します。

雌頭花：

- ① 総苞片(茎葉が花の基部に輪状に取り囲むように集まったものが総苞で、それぞれの片を総苞片といいます)が合着して壺状になり、中には、花びらがなく雌しべだけになった雌花が2個入っています。雌しべの花柱は、先端についているくちばし状の突起の中から総苞の外に突き出ます。
- ② 雌しべは総苞に包まれたまま成熟し、2個のそう果(小さな乾いた果実)になります。そう果を包んだ総苞を果苞(又は壺状体)と呼びます。
- ③ 果苞は長さ1.8～2.5 cmの楕円形で、熟すと褐色になります。表面には長さ3～6 mmのカギ状に曲がった刺が多く、動物などにくっついて運ばれます。

アメリカオニアザミ



ヒレアザミ



いずれも全体にわたり鋭い刺を持つひれ(翼)があり、触ると痛いです。

キツネアザミ



オオキンケイギク



ハキダメギク



ノボロギク



ハキダメギクは、東京の世田谷のはきだめで初めて見つかったことからこの名があります(命名者は牧野富太郎博士)。気の毒な名前が付けられたものです。ノボロギクは、野に咲く「ボロギク」からこの名があります(次ページ参照)。

ベニバナボロギク



ダンドボロギク



ベニバナボロギクはレンガ色の花を下向きに、ダンドボロギクは淡黄色～緑黄色の花を上向きにつけます。ダンドボロギクは愛知県の段戸山で1933年に最初に見つけられたことから、ダンドの名がつけられています。

※「ボロギク」について

写真はありませんが、「サワギク」という花の別名がボロギクです。花がまだ残っているうちに果実の白い冠毛がボサボサにつくため、その様子を「ボロ布」という意味をもつ「襤褸（ボロ）」に例えての別名です。

ノボロギクやベニバナボロギク、ダンドボロギクもこの類です。ナルトサワギク(No.196)もこれらに似た果実をつけます。参考としてセイヨウタンポポの果実を追加しました。



ヤグルマギク



ナルトサワギク

